

氏名	今野 泰三	
学位の種類	博士（文学）	
学位記番号	第 6208 号	
授与報告番号	(乙)第 2797 号	
学位授与年月日	平成 27 年 12 月 25 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 項	
学位論文名	ヨルダン川西岸地区におけるイスラエル入植地と民族宗教派入植者に関する 考察—死／死者の景観と規範共同体の境界—	
論文審査委員	主 査 山崎孝史	副 査 大場茂明
	副 査 大黒俊二	

論文内容の要旨

本論文は「民族」とは何か。「宗教」とは何か。民族と宗教の何が、世界中の人々を強く惹きつけるのか。なぜ、民族と宗教は、社会を統合する力になると同時に、激しい争いをも引き起こしてしまうのか。人は、民族や宗教を掲げ、それによって他者を創り、それを排除してしか、理想とする社会は作れないのか。あるいは、それを克服する手段はすでに私たちの手元にあるのだろうか。それは民族と宗教の中にこそあるのか。それともそれ以外のものの中にあるのだろうか。—といった問いを念頭に置く。

そこから、本論文は、宗教とナショナリズムと土地（領土）が絡み合っ 100 年の紛争地図を織り成してきたパレスチナ／イスラエルを取り上げ、その中でも特に、1967 年戦争以降、ヨルダン川西岸地区で強引な土地収奪と入植を続ける「民族宗教派」(dati leumi ; national religious) と呼ばれる極右ユダヤ人入植者たちに着目する。彼／彼女ら民族宗教派の入植者たちは、ユダヤ教言説とシオニズム思想を固く結び付け、その結合状態を「神の意思の現れ」として神聖化してきた。本論文は、パレスチナ／イスラエル地域の問題・紛争を理解する上で不可欠である、これら民族宗教派の入植者たちの行動の背景にある論理と、彼／彼女らが西岸で形成した入植者社会・文化をフィールド調査によって深く理解し、それによってこれまでのパレスチナ／イスラエル研究、入植地問題研究、民族宗教派研究において十分に検討されていなかった諸問題について、新たな知見と視角を提示することを目的とする。特に、この目的を達成するための手法として、このテーマにおいて重要であるにもかかわらず、いまだ十分な研究がなされていない、入植の過程で殺された隣人や親族の死を巡る民族宗教派入植者のナラティブとそれが反映された記念碑や墓石の分析、および民族宗教派の共同体内部での規範の変化に伴う他者との境界の揺れ動きの諸相が考察される。

本論文の全体を通じて、民族宗教派が西岸で実践し、その空間改変の根拠・動機としてきた「贖いのシオニズム」と呼ばれるイデオロギーとそれに基づく非妥協的かつ暴力的な入植の実践や歴史観や紛争観が、パレスチナ／イスラエル問題の総体とどのように関係しているのかが示される。そしてそうした入植過程の背後において、彼／彼女らが、死／死者とイデオロギーを同時に正当化し、さらなる紛争と入植地建設をもたらすような言説と文化を作り上げていることが示された。加えて、民族宗教派入植者たちが入植地撤収という新たなイスラエル政府の政策に抵抗するための手段として、世俗的なイスラエル人とともに暮らす「混住入植地」という新しい入植地の形態を作り、それを西岸各地で広げることでイスラエル社会において自らの正統性を高めていこうとしており、それが西岸丘陵地帯の直接的暴力を行使する入植者たち以上に危険かつ深刻なインパクトをパレスチナ／イスラエルに与える可能性があることが明らかされた。

本論文は、まず第 1 章で、既存のパレスチナ／イスラエル研究、入植地研究、民族宗教派の研究において、民族宗教派入植者たちが強硬なイデオロギーに基づいて単に入植地建設を進めているだけでなく、その過程で殺された隣人・仲間・親族とその死を追悼・顕彰する独自の文化を形成し、それをイデオロギーや入植活動と結びつけながら、景観上に表象して再生産している重要な側面が十分に検討されていないことを示す。そしてそうした研究が、宗教地理学や政治地理学で論じられている視角や研究課題とも強い関連性を持つことを示した。加えて、そうした独自のイデオロギーと景観を特徴

とする民族宗教派入植者の共同体がイスラエル社会総体の中にどのように位置づけられ、どのような境界を「他者」である世俗派のイスラエル人やパレスチナ人との間に形成し、そうした境界（や関係性）が近年の政治状況の変化の中で新しい動きを示している点についても—それがパレスチナ／イスラエル問題へのインパクトを考慮すれば重要であるにもかかわらず—、既存の研究では十分に検討されてこなかったことが指摘される。そして、西岸の民族宗教派入植者たちの独自の文化と空間的实践、および彼／彼女らが主体的な（加害者としての）役割を果たしてきた「入植地問題」を理解する上で欠かすことができない、死／死者のナラティブと景観や境界のダイナミクスを分析していくこと、パレスチナ／イスラエル研究、入植地問題研究、および民族宗教派の研究として新規かつ重要であることが論じられる。

それを踏まえた第2章では、1967年にイスラエルが新たな領土を占領するに至った経緯や、それら占領地において入植地建設を進めてきた歴史的経緯が概観され、イスラエル国家・軍が主体的に「平和を求めている」という外向けのレトリックとは正反対の動きとして—入植地建設を進めてきたことを示した。そしてそのプロセスにおいて、当初は労働党政権と対立関係にあった民族宗教派の入植者たちが、リクード政権において正統なアクターとして認められ、入植地建設の最前線に立つエージェントとして機能し、西岸に強固な権力基盤と独自の共同体・文化を形成していると論じた。

第3章では、第2章の政治学的・地政学的側面からの入植地問題に関する検討を踏まえて、国家・軍のエージェントとして入植した入植者たちが第1次インティファダ以降殺されるケースが増えるとともに、仲間や親族の死を「贖いのシオニズム」と結び付けるナラティブや記念碑建設などの空間的实践を創出し、その結びつきによって死／死者と「贖いのシオニズム」が同時に正当化されている様相が明らかにされる。さらに、そうした結びつきが「記念碑入植地」の建設という空間的实践につながっている一方、アラブ人やパレスチナ人に対する一方的な敵対心と偏狭な歴史観・紛争観を強め、それを正当化する機能をも果たしていることを明らかにした。他方で、隣人や親族の死が「贖いのシオニズム」や神に対する信仰を弱め、西岸丘陵部からその周辺部やイスラエル領内へと逆流する移動をもたらすケースも少ないながら存在しており、そうした逆流するケースの経緯や当事者の語りには、死／死者というテーマに限定されない、より広範な民族宗教派内での近年の変化と新たな動きが反映されていることが示された。

第4章では、前章までに検討された民族宗教派が西岸で創出した独自の文化と景観、および死を契機として逆流する移動を検討する中で新たに浮かび上がってきた以下の疑問に答えるため、ヨルダン渓谷の「混住入植地」であるモシャーフ・ギティットを対象とした分析が行われる。それらの疑問とはすなわち、民族宗教派の特殊なイデオロギーや行動が世俗的なイスラエル・ユダヤ人との関係性にどのような影響を与えているのか、占領地での入植地建設を最大の価値とはしない宗教シオニズムの新たな意味づけが民族宗教派入植者たちの間でどの程度広まっているか、「贖いのシオニズム」を進めるための戦略として新たに採用されている「混住入植地」建設の動きが社会的・政治的背景とどのように関連付けられるのか、そうした民族宗教派の中での新しい規範や価値の登場が西岸の世俗的入植者やパレスチナ人との境界にどのような影響を与えているのかといった問いである。特に著者は、それらの問いの根源には、イスラエル国家、イスラエル社会の主流である世俗シオニスト、民族宗教派の間の法・規範・価値観の競合・対立・調和という問題が関係していると考え、それを読み解くための一つの手法として世俗派と宗教派が混住するヨルダン渓谷の入植地（モシャーフ・ギティット）で調査を行い、その社会経済構造やイスラエル国家・ユダヤ機関などとの関係を明らかにするとともに、そこに暮らす民族宗教派と世俗派の入植者たちの境界や関係性の内実と変化の様相を分析し、それをパレスチナ人と入植者との差別と不平等が構造的に埋め込まれた境界の在り方と関連づけて検討した。

その結果、こうした「混住入植地」の試みが、仲間や親族の死を契機とする逆流する移動のケースと同様、必ずしもイデオロギーや規範の問い直しを伴うものではなく、むしろそれを補強・強化・推進する手段と見なされていることが確認された。しかもパレスチナ人との差別的・植民地的な関係性の問い直しも全く伴わないにもかかわらず、そうした試みがイスラエル社会で「正統な領域」と見なされる「hityashvut（定住地）」に参入する契機となっており、西岸丘陵地帯で日々パレスチナ人に対する暴力を行使し、傍若無人にパレスチナ人たちの耕地や財産を破壊している教条主義的な民族宗教派の入植者以上に、入植地問題およびパレスチナ／イスラエル問題全体に危険で深刻なインパクトを与える可能性があることが結論付けられる。

本論文は、これらの分析・考察を通じ、パレスチナ・イスラエル紛争および「入植地問題」のダイ

ナミズムと、そこでの重要なアクターである民族宗教派の独自の社会と文化の在り方を、多層的・多角的に描くことに努めている。特に長期間のフィールド調査によって、入植地問題が一般に理解されているような一様なものではないこと、西岸の入植地と言っても実は多様であり、その内部には様々な文化・語り・記憶の対立や競合が存在していることが明らかにされている。また、民族宗教派のイデオロギーと政治的実践が織り成す独自の社会・文化・境界のダイナミズムの解明を通して、民族宗教派のイデオロギー、ナラティブ、景観、建造環境、社会経済構造、地政学的背景などが総合的に観察・記録・分析され、中東地域研究、パレスチナ／イスラエル地域研究、入植地問題研究、民族宗教派研究に重要かつ新しい視点と多くの貴重な情報を提供する成果となっている。

論文審査の結果の要旨

パレスチナ／イスラエル地域を対象とした研究は国内でも数多いが、本論文は、日本人による地理学的研究として稀有な論考であり、政治地理学的研究としてもおそらく戦後初めてのものであり、その意義を高く評価できる。また、シオニズム運動に関する研究の多くが世俗的な労働シオニストを対象としていることに対して、本論文はこれまで十分に検討されてこなかった民族宗教派シオニストのイデオロギーと入植活動に焦点を当てており、その点で独自性が非常に高い。方法論的には、数度かつ長期のヨルダン川西岸地区滞在を通して、ユダヤ人入植地での丹念なインタビューとフィールドワークそして日・英・ヘブライ・アラビアの四言語にわたる文献資料の渉猟をベースとしており、今野氏の卓越した研究能力がいかに発揮された論考である。

本論文の構成は、導入となる序章、先行研究の展望と課題設定からなる第1章、イスラエルによるパレスチナの占領と入植の歴史的経緯を詳述した第2章、民族宗教派の死と死者をめぐる語りについて墓碑を中心に考察した第3章、民族宗教派と世俗派が混住する入植地の実態を描いた第4章、そして民族宗教派の入植の政治地理学的意味を集約した結論からなる。現地調査からなる章が二章という点では、地理学分野の博士論文として実証部分がやや物足りないが、各章の記述には厚みがあり、紛争地帯の軍事的緊張を伴う入植地での調査の困難性を鑑みても、現時点でのパレスチナ／イスラエル問題の隠れた局面を描出した大変貴重な研究成果と言える。

本論部分を構成する第1章は、パレスチナ／イスラエルの事例を中心に、紛争地における宗教と政治に関する地理学的研究を子細に展望・論評し、本論全体に関わる研究課題を浮き彫りにしている。論述内容に体系性と開拓・植民地研究への目配りをやや欠くものの、日・英・ヘブライ・アラビアの四言語にわたる先行研究を渉猟する中で、政治研究における宗教への着目の重要性が説得的に論じられており、今野氏の文献読解力と批判的評論の非凡さがうかがえる。

第2章で論じられるイスラエルの占領と入植政策は、主として既往研究に依拠しており、政治地理学というよりイスラエルの占領・入植の史的考察が展開される。その点で全編がオリジナリティに富む考察とまでは言えないが、第三章以降の実証研究部分に対する基本的な歴史的・地政学的文脈を詳説しており、本論文を理解する上で重要なバックグラウンドを提供している。

第3章は民族宗教派の遺族の語りや墓石・記念碑上の記述という言語資料をもとに、彼／彼女らの宗教政治的イデオロギーの構築・再構築を分析した大変興味深い章である。ただし、そうした卓越した着想と考察に対して分析の方法論について疑問点が散見された。まずインタビューの手法について、聞き手と語り手との関係性、語り手の発話への現実の反映の程度、語り手の認識やポジショナリティの揺らぎというオーラル・ヒストリー研究一般にみられる方法論的課題への配慮がやや不十分な点である。また、異なった種類の言語資料を同一の分析類型に組み込む手法も、語りを伝える媒体の性質の多様性を捨象している嫌いがある。第三章の分析にも通底する傾向として、今野氏は語られたもの、表象されたものだけから民族宗教派の認識を理解しがちであり、民族宗教派の日常実践自体を観察し記述するような姿勢がより望ましい。もっとも、こうした方法論上の問題は、今野氏の今後の努力によって十分改善できると考えられ、本論文の評価を揺るがすものではない。

第4章は、近年の違法入植地の維持戦略として登場した、世俗派と民族宗教派双方が居住する「混住入植地」における両派の相互関係から混住入植地の占領過程にもたらす影響を批判的に考察しており、非常に含蓄に富むとともにこの種の入植地の拡大に警鐘を鳴らす論考である。とりわけ、こうした辺境地帯における入植地の展開と入植地内において居住者セクトの境界の融解という「越境」のプロセスが、結果的にヨルダン川西岸地区における違法入植地の存在を正統化していくという結論には

非常に説得力がある。若干、「境界」、「景観」、あるいは「建造環境」とい分析概念の内実が十分に省察されていない嫌いがあるが、第3章と共にフィールドワークによる実証的研究として本論のハイライトを構成している。

結論部分でも指摘されているように、本論文はこれまでの内外の研究で看過されてきた民族宗教派によるヨルダン川西岸入植地での多様な空間的实践を活写した稀有な論考と言える。研究の視角はもっぱらユダヤ人民族宗教派に向けられ、その差別と排斥の対象であるパレスチナ人はほとんど登場しない。その点では、パレスチナ／イスラエル問題における「悪＝イスラエル」の側を描くという今野氏のやや二元論的な認識とポジショナリティが前面に出ている。しかし、イスラエル国内において民族宗教派の人口比率は約2割と推定されており、彼／彼女らの非常に攻撃的で反パレスチナ的な入植活動がイスラエルの政治過程に少なからざる影響を及ぼしうることを鑑みると、本論文はパレスチナ／イスラエル研究の今日的到達点を示す成果として、一日も早く公刊されることが期待される。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値すると認められる。